

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32412

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830072

研究課題名(和文) 養護教諭が保健室で行う中学生の健康管理能力育成のための対応プロセスの概念化

研究課題名(英文) Conceptualization of "Yogo" teachers' dealing-with processes in their office for fostering health-maintenance ability of junior high school students

研究代表者

齊藤 理砂子 (Risako, Saito)

聖学院大学・人間福祉学部・准教授

研究者番号：90634907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、養護教諭が保健室で行っている中学生の健康管理能力を育成するための対応プロセスを概念化するために「自己決定・判断能力」「自己表現能力」「対人関係能力」の3つに着目し、それらの育成のための対応の根拠と評価の視点を実践知から明確化することを試みた。その結果、自己決定・判断能力育成のための対応を例にあげると、対応の根拠では「自分で判断するための選択肢がない」「自分の判断を他者に伝える方法を知らない」「自分の身体症状を考慮した適切な判断がわからない」等が明確化され、対応の評価では「子どもが自分で判断した」等が明確化された。また、上記の結果を用いて対応能力を測定するための自己評価尺度を作成した。

研究成果の概要(英文)：In order to conceptualize "Yogo" teachers' dealing-with processes in their office for fostering health-maintenance ability of junior high school students, the current research focused on three abilities, "self-determination/self-judgment ability," "self-expressing ability" and "interpersonal relation ability," and tried to clarify the reasons and the evaluations of the dealing-with processes from practical knowledge. As a result, take the dealing process for fostering self-determination/self-judgment ability for instance, "they do not have choices to decide by themselves," "they do not know the way to tell others their decisions," "they cannot make appropriate decisions taking their physical status into consideration," etc. were conceptualized for the reasons. "Children made their own choices," etc. were clarified for the evaluation. Moreover, we created the self-evaluation scale for measuring the dealing-with ability using the results described above.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：養護教諭 保健室 中学生の健康管理能力 保健室における中学生の対人関係能力の育成 保健室における中学生の自己表現能力の育成 保健室における中学生の自己判断・決定能力の育成

## 1. 研究開始当初の背景

養護教諭は、保健室において児童生徒が自分自身の健康を管理する能力、いわゆる健康管理能力を育成するために、児童生徒一人ひとりに必要な能力を見極めながら日々、様々な対応をしている。しかし、保健室に来室した児童生徒に対して、養護教諭はどのような能力に着目して健康管理能力を育成しようとしているかを体系的に概念化したものは見当たらなかった。そこで、第一研究<sup>1)</sup>では、養護教諭が行う中学生一人ひとりを対象とした健康管理能力を育成するための対応とその視点について明確化することを試みた。その結果、養護教諭は中学生一人ひとりの健康管理能力を育成する際に、けがや疾病の自己管理能力だけでなく、「自己表現能力」「対人関係能力」「自己決定・判断能力」等の17の視点に目を向けて、日々対応していることが明らかになった。この結果は、同様な背景をもつ生徒が現れた時に、意図的に対応できるという意味で大変意義がある研究であったと考える。しかし、第一研究<sup>1)</sup>で明確化された健康管理能力を育成するための養護教諭の視点とその対応のみでは、実際に実践するにはまだ不十分な面がある。養護教諭がその視点に目を向けた理由を述べることができなければ、他職員との共通理解を得ることができず、連携した組織的な対応が難しい。さらに、養護教諭が対応した結果、子どもにどのような成果が現れたか等の評価を行うことができなければ、その子どもに即した対応につなげていくことは難しい。養護教諭が行った対応について継続的に評価を行うことにより、育成しようとする子どもの状態を見据えた計画的な対応が可能になる。上記の理由から、まずは第一研究<sup>1)</sup>に続いて、対応のバリエーションを追加することを試みた(第二研究<sup>2)</sup>)。そして本研究では、第一研究<sup>1)</sup>、第二研究<sup>2)</sup>をもとに、養護教諭が保健室で行っている対応の根拠と評価の方法を実践知から明確化し、「判断の基準」「評価の視点」の概念化を図りたいと考えた。また、第一研究<sup>1)</sup>、第二研究<sup>2)</sup>で明確化された対応の能力(対応力)を測定するために、自己評価尺度の開発を考えたい。

特に今回の研究においては、第一研究<sup>1)</sup>で明確化された17の視点のうち、対応のバリエーションが多かった「自己決定・判断能力の育成」「自己表現能力の育成」「対人関係能力の育成」に着目した。これらの能力は、現在、中学生の健康管理能力を育成する上で非常に重要な位置を占めている。

## 2. 研究の目的

本研究の最終的な目的は、養護教諭が保健室で行っている中学生を対象とした健康管理能力育成のための対応のプロセスを概念化することである。また、その結果を用いて、対応力を測定するための自己評価尺度を開発することである。対応のプロセスを概念化

するためには、養護教諭が行う健康管理能力の育成のための対応の根拠と評価の方法を実践知から明確化することが必要不可欠であり、対応の「判断の基準」と「評価の視点」の概念化を図る必要がある。また、対応力の自己評価尺度を開発するためには、第一研究<sup>1)</sup>、第二研究<sup>2)</sup>で明確化された対応から必要と考えられる対応を抽出し、信頼性と妥当性を確認することが必要である。

## 3. 研究の方法

### (1) 対応の根拠と評価の視点の明確化

#### 調査対象者

調査対象は、関東2都県の国公立中学校に現在勤務している実務経験10年以上の養護教諭より、知人を通して21名選出した。選出された21名は、保健室経営や健康教育等、様々な面において優れていると周囲から評価を受けている養護教諭として推薦された者であった。対象者の背景は、養護教諭経験年数は13年から40年であり、平均経験年数は26.8年であった。このうち、中学校経験年数は1~36年であり、平均中学校経験年数は17.9年であった。

#### データ収集方法

データは2012年7月~9月にかけて収集した。1人あたり30分~1時間程度の個人インタビューを、インタビューア1名で行った。質問内容は、「自己決定・判断能力、自己表現能力、対人関係能力を育成する必要性を感じたのはどのような時か」「実際に対応した結果、子どもはどのような成果が現れたか。その要因は何か」とした。インタビュー内容は対象者から書面にて同意を得て録音し、逐語録を作成した。

#### データ分析方法

分析は、インタビューで得た内容の逐語録をカテゴリ化することで行った。カテゴリ化は、養護教諭の対応の根拠、対応、対応前後の子どもの状態等に分けて行った。最後に、学識経験者1名、現役養護教諭5名、大学院の養護教諭養成課程に在籍する学生2名の計8名により、結果の修正を行った。

#### 研究の信用性

量的研究では信用性を確保する際に、信頼性と妥当性という言葉を用いるが、質的研究においては、信憑性や正確性、真実性といった言葉を用いる。質的研究の結果が現実を表しているときに、真実性があるとされる。研究者は真実性を確立することによって、その研究が厳密であることを示す必要があり、真実性は研究の全過程において重要とされている。

本研究においては、信憑性や正確性、真実性を確保するための手続きとして、データ収集の正確性を高めるために、インタビューアの面接技術と態度に熟知しているインタ

ビュー経験者が行った。事実に忠実であるという結果の真実性を高めるためには、経験年数 10 年以上の実践があり、経験豊かで多くの方にその実践力を認められ、なおかつ適切な判断のもと生徒に対応していると思われる、研究協力を得られた養護教諭経験者 21 名を対象とした。さらに、データ収集においては、面接内容をレコーダーに録音した。

結果の信憑性や正確性、真実性を高めるためには、質的分析経験者 4 名を含めた学識経験者、現役養護教諭等、計 8 名により行った。なお、本研究はインタビューで得られた全てのデータの逐語録を作成し、4 名の質的分析経験者が客観的に分析を行った。

#### 倫理的配慮

倫理的配慮は、研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を得た。研究の依頼に関しては、研究趣旨を文書及び口頭にて説明し、プライバシーを侵害することがないことを約束した。調査は、承諾書を得てから実施した。インタビューに関しては、レコーダーにて録音をしたが、その内容は公開することがないこと、逐語録についても個人が特定できないこと、逐語録についても個人が特定できないこと、逐語録についても個人が特定できないことを書面にて確約した。データは、第三者がアクセスできない場所に保管し、研究が終了次第、破棄することを確約した。

#### (2) 尺度の開発(信頼性、妥当性の検討)

##### 調査対象者

調査対象者は、全国中学校から系統抽出法を用いて 1000 校、選出した。回収率は 48% であった。A 県は、予備調査の対象としたため、今回の調査対象から省いた。

有効回答数は 467 人(回答数の 98%)、性別では男性 1 名、女性 466 人であった。平均年齢±標準偏差は 44.8±11.3 歳、平均養護教諭経験年数±標準偏差は 21.8±11.0 歳であった。

##### データ収集方法

調査期間は、2014 年 3 月 3 日~3 月 31 日であった。

調査内容は、調査対象者の属性に関しては、性別、年齢、経験年数(小中高等学校、特別支援学校、その他)、在籍学校生徒数、保健室来室者数(1 日平均)を調査した。養育スキルに関しては、渡邊(2013)が作成した母親の養育スキル尺度(6 件法)を利用した。自己決定・判断能力、自己表現能力、対人関係能力の育成のための対応に関しては、第一研究<sup>1)</sup>、第二研究<sup>2)</sup>で作成したものを利用した。その際に、妥当な対応の抽出を行うために、学術経験者、現役養護教諭等による研究会を行い、検討を重ねた。また、予備調査の結果、回答の偏りがみられたため、本調査ではそれを防ぐために、4~5 項目の逆項目を作成したり、「いつも」「常に」等の表現を追加したりする等、工夫をした。評定は 5 件法を

活用し、選択肢は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらでもない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」とした。

#### データ分析方法

自己決定・判断能力、自己表現能力、対人関係能力の育成のための対応に関しては、因子分析により、概念の妥当性を検討した。そして、尺度得点を計算し、養育スキル尺度(渡邊 2013)との相関分析により、外部基準妥当性の検討を行った。統計処理は SPSS 22 for windows を用いて行った。

#### 倫理的配慮

倫理的配慮は、研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を得た。回答は未記名であり、かつプライバシーを侵害することがないことを記載した研究の説明書を同封し、回答の返信をもって同意を得たものと判断した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 対応の根拠と評価の視点の明確化

###### 自己決定・判断能力育成のための対応

養護教諭が、保健室に来室した生徒に「自己決定・判断能力」を育成しようと判断した時の対応の根拠には、「自分で判断するための選択肢がない」「自分の判断を他者に伝える方法を知らない」「自分の身体症状を考慮した適切な判断がわからない」等が明確化された。これらの根拠にもとづき、養護教諭は、「判断するための材料を教える」「選択肢を与えて判断を促す」「本人の意思を聞く(休養の有無等)」「自分の判断を他者に伝える方法を教える」「自分の身体症状を考慮した適切な判断を教える」等の対応を行っていることが明らかになった。そして養護教諭は、「子どもが自分で判断した」等の子どもの変化から養護教諭自身の対応を評価していることが明らかになった。

###### 自己表現能力育成のための対応

養護教諭が、保健室に来室した生徒に「自己表現能力」を育成しようと判断した時の対応の根拠には、「母親がものの良し悪しを全部判断する」「母親の言動が先立つ」「本人が自分で伝える機会がない」「他者に自分の意思を伝えられない」「適切な伝え方がわからない」「他者に対する誤った固定観念がある」「他者に自分の意思を伝えることに不安感がある」等が明確化された。これらの根拠にもとづき、養護教諭は、「話をきく」「本人が考える時間を待つ」「自分の意思を他者に伝えることの大切さを教える」「自分の意思を他者に伝えるように促す」「自分の意思の伝え方を教える」「他者に対する固定観念をなくす」「安心感を与える」等の対応を行っていることが明らかになった。そして養護教諭は、「子どもが言語化できた」「子どもが考える時間がもてた」「子どもが自分で他者に意

思を伝えた」等の子どもの変化から養護教諭自身の対応を評価していることが明らかになった。

### 対人関係能力育成のための対応

養護教諭が、保健室に来室した生徒に「対人関係能力」を育成しようと判断した時の対応の根拠には、「自信がない」「他者から褒められる経験が少ない」「他者から褒められる機会が少ない」「他者に喜ばれた経験が少ない」「他者と接する機会が少ない」等が明確化された。これらの根拠にもとづき、養護教諭は、「他者と接する場面を設定する」「他者から褒められる場面をつくる」「他者から喜ばれる場面をつくる」「生徒が自信を持てるような機会をつくる」等の対応を行っていることが明らかになった。そして養護教諭は、「子どもが他者と積極的に関わるようになった」等の子どもの変化から養護教諭自身の対応を評価していることが明らかになった。

## (2) 尺度の開発(信頼性、妥当性の検討)

### 信頼性の検討

因子分析の結果、尺度全体のクロンバック係数は、 $\alpha=0.96$ であった。自己決定・判断能力育成のための対応は  $\alpha=0.90$ 、自己表現能力育成のための対応は  $\alpha=0.87$ 、対人関係能力育成のための対応は  $\alpha=0.91$ であった。これらの結果より、3つの能力における信頼性が確認できた。

### 妥当性の検討

養育スキル尺度(渡邊 2013)得点と自作尺度得点(自己決定・判断能力育成のための対応、自己表現能力育成のための対応、対人関係能力育成のための対応)との相関分析の結果、 $r=0.70$ であったため、外部基準妥当性が確認された(表1)。

### 自己評価尺度の作成

尺度全体、各下位尺度における尺度得点の平均点、標準偏差については、表2に示す通りである。

自己評価尺度は、自己決定・判断能力育成の対応、自己表現能力育成の対応、対人関係能力育成の対応の3つの下位尺度に分けて因子分析を行い、その結果に基づき作成した。

その結果、自己決定・判断能力育成のための対応では、【自己判断の促進】【自信の強化】【主体性の尊重】の3つの因子が抽出された(表3)。自己表現能力育成のための対応では、【主体性の尊重】【コミュニケーションスキルの指導】等、5つの因子が抽出された。対人関係能力育成の対応では、【他者理解の促進】【コミュニケーションスキルの指導】【主体的な対人関係の促進】の3つの因子が抽出された。今後は、これらの因子をもとに、自己評価尺度をより精錬化する予定である。

表1 尺度間の相関(Pearsonの相関係数)

養育スキル	自作尺度( )			
	自作尺度( )	自己決定・判断能力育成のための対応	自己表現能力育成のための対応	対人関係能力育成のための対応
養育スキル	1	.70**	.67**	.63**
自作尺度( )		1	.93**	.93**
自己決定・判断能力育成のための対応			1	.78**
自己表現能力育成のための対応				1
対人関係能力育成のための対応				

\*\*P<0.01 \*P<0.05

表2 尺度得点の平均点および標準偏差

自作尺度( )	平均値±標準偏差
自作尺度( )	188.3±21.6
自己決定・判断能力育成のための対応	70.9±8.4
自己表現能力育成のための対応	62.6±7.4
対人関係能力育成のための対応	54.7±7.1

表3 自己決定・判断能力育成の対応(因子分析結果、一部)

自己判断の促進				
7	子どもが自分で決定、判断できない原因を探りながら、いつも接している	0.82	0.01	-0.11
5	子どもが自分でできること、できないことを、子ども自身で理解できるように対応している	0.81	0.05	-0.14
自信の強化				
15	子どもが自分で決定、判断できることを意図した、知識提供や情報提供を、あまりしていない*	-0.13	0.71	0.17
11	子どもを尊重した言葉かけを、子どもにすることが少ない*	0.11	0.70	-0.05
主体性の尊重				
19	選択肢を与えて、その中から子どもが自分で選択できるように、いつも接している	0.02	0.07	0.73
18	子どもが自分で決定、判断しようとする気持ちを、必ず尊重している	0.01	-0.09	0.67

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiserの正規化を伴うRマックス法  
 $\alpha=0.90$  \*は逆項目

## 引用文献

- 1) 齊藤理砂子 岡田加奈子 高田しずか: 中学生の健康管理能力を一人ひとりに育成するための養護教諭の日々の対応とその視点 - 養護教諭 30名に対するインタビュー調査より - , 学校保健研究 第52巻1号, 2010.
- 2) 齊藤理砂子 岡田加奈子: 中学生の自己決定・判断能力、自己表現能力、対人関係能力を育成するための養護教諭の対応 インタビュー調査による対応のバリエーション拡大の試み 日本健康相談活動学会誌 Vol.8 No.1 2013.

## 5 . 主な発表論文等

( 研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線 )

[ 学会発表 ] ( 計 2 件 )

Saito Risako, Okada Kanako; Forming concepts for corresponding processes by “Yogo” teachers to nurture junior high students’ abilities for health care and management - Focusing on their self-determination and decision-making abilities, 17th Biennial School Nurse International Conference Ljubljana, Slovenia, 2013

Saito Risako, The conditions of Japanese students when the “Yogo” teachers (in junior high school health room) have judged that it is necessary to nurture their self-expressing the abilities, 21st IUHPE World Conference on Health Promotion, Pattaya, Thailand, 2013

## 6 . 研究組織

(1) 研究代表者

齊藤 理砂子 (SAITO, Risako)

聖学院大学・人間福祉学部・こども心理学  
科・准教授

研究者番号 : 90634907